

卒業生からの言葉・恩師からの言葉

卒業生からの言葉



18期生
月陽 (つきよ)

はじめまして。18期生でシンガーソングライターの『月陽』(つきよ)と申します。『高槻まつり40周年記念ソング〜未来への架け橋〜』を毎年フィナーレで唄ったり、音楽で高槻を盛り上げたいと、毎月阪急高槻駅高架下広場で無料の音楽イベントを開催するチーム『TAKATSUKI 唄まきstation』のリーダーをつとめたり、高槻を中心に活動しています。そんなわたしが夢と希望と少しの不安を胸に三島高校に入学したのは、かれこれ30年以上前になりますが、今なお色あせない記憶がいくつあつて、その一つは新入生へのクラブ勧誘です。どの先輩も自分たちのクラブに入部させたくて、熱弁したりおもしろいことを言ったりする中、当時はめずらしかった長髪の男子がぶつきらばうに『軽音楽部よろしく』と一言だけ言い放ち、すぐに舞台から立ち去ってゆきました。その姿にやけに惹かれたのが、三島高校の自由な校風を感じたのを覚えています。子供の頃から唄うのが好きだったわたしは、人前で唄えるクラブと分かりすぐに入部。これがわたしの音楽人生のはじまりでした。当時顧問だった影山先生がとても寛大だったおかげで、みんなのびのび活動できま

した。一学年下の後輩たちとバンドを組んでいたわたしが、卒業後後輩たちの最後の文化祭に出演した時も『ホンマはアカンけど、きみやからまあええか』と許してくれました。ちなみに19期生の卒業アルバムにしろつとわたし写ってます。

そんな楽しく音楽三昧な高校生活でしたが、まさかこんなに長く、しかも本格的に音楽を続けるとは、あの頃のわたしは思いも寄らなかつたでしょう。紆余曲折ありましたが、振り返れば本当にたくさんのお人々のおかげだと、つくづく感謝の気持ちがあふれます。そして今のわたしの礎を築いてくれた「三島高校」にも感謝！50周年おめでとう&ありがとう！この先もたくさん生徒たちがはばたきますように☆



恩師からの言葉

田職員

奥由多加

創立50周年おめでとうございます。若き日、草創の息吹きに触れる機会を与えられた二人として感慨も一人です。私の教員生活は昭和46年、2期生の皆さんの入学と同時にここ三島高校から始まりました。当時は高校紛争がくすぶっていた頃で、初代中島校長はその轍を踏まないことをテーマに新しい学校作りを奮闘されていきました。そのためか「若い奴が欲しいんだ」と面接の折におっしゃっていたことを覚えています。確かに20代の先生方が多数おられ、私も含め多かれ少なかれ大学紛争を経験してきた年代です。で議論が熱く、職員会議でも臆さず手が挙がっていたことを記憶しています。

中島校長が当初手掛けられたことをいくつか挙げていくと、今では当たり前のようになっているブレザー型の制服が採用されたこと。素材はユニチカアムンゼンというグレーの生地で、特に男子の制服は詰襟ではなく、もつと首周りの楽なデザインが考えられました。Vゾーンがやや狭めでしたので「阪急の駅員さん」と呼ばれたことも。また、中間審査を廃止し、その代わりに小テストを頻繁に行って、学期末の通知表に審査成績と平常点を併記するという評価法が採られたこと。ただ期末審査の範囲が長くなってしまうので、単元テストと称して授業の中で事実上の中間審査が次第に行われるようになりました。更に宿泊を

伴う行事が多く行われたのも特色のひとつでした。入学直後に行われる「HR合宿」は後に多くの学校が実施することになります。これも三島高校が先鞭をかけたと聞いています。臨海学校もありました。久美浜で3泊ぐらいしたでしょうか。2団が入れ替わる形で行きますので、体育科の先生方のほか、若手で体力に自信のありそうなメンバーが1週間ぶつ通しで付き添っていました。中島校長はいかなる事故も起こさないと鬼の形相で指揮をとっておられました。2年時の修学旅行はもちろんです。希望者対象に冬のスキー研修までありました。このような一連の行事にまさに若いエネルギーが生かされていました。残念なのは開校から数年たった頃すべてに亘って総括が行われ、多くの斬新な取り組みが消えて行ったことです。尊敬するあるベテランの先生が、「随分変わってしまったね」とボツリと漏らしておられたことが今も忘れられません。しかしあの頃先生も生徒も団子になって学校作りを励んだことが後の発展につながる最初の一步になったことは間違いありません。

この3月で48年の教員生活にピリオドを打つことになりましたが、教員としてのスタートを切った三島高校が私の原点としてまた青春の記念碑としていつも胸の中にあります。拙い授業に付き合ってください卒業生の皆さん、右も左も分からない私を導いてくださった先生方、ありがとうございます。

終わりに、我が母校とも言える三島高校が今日よりまた次の50年に向かって更なる飛躍を遂げられんことを祈りつつ私の懐旧談といたします。